

年號月日

宛所御目付衆不殘記之、但月番之衆を先に注之由、尤折紙也。

一願人誓詞案

起請文

私儀何十何歳に罷成候、何持病御座候間、馬上に而は奉公難勤御座候間、依之周防守方より、乗物御赦免之御斷申上候通御座候、右之趣於僞申上者、

式目之神文、尤牛王に血判、但宛所御目付衆、不殘様書也。

右は御目付衆一人之前に而血判シ、それより御禮として、御目付衆不殘廻ル、

〔政談^四〕當時誓詞ト云コト盛ニテ、御作法ノ様ニ成、役替ノ度々ニ誓詞ヲシ、駕籠ノ誓詞、又ハ病氣ノ斷ニ誓文狀ヲ出スコト不宜コト也。^{○中略} 駕籠ノ誓詞ハ、先第一奉公人ノ年多ハ、實ノ年ニ

非ザル故、最初ヨリ誓詞ヲ破也、駕籠ハ其頭其主人ヨリ斷ナレバ、誓詞無テ不苦事也、

〔憲教類典^三之三十六〕貞享元甲子年三月

一筆致啓達候、然ば麻唯月儀、持病之痔痛馬上に而難勤其身誓文狀被仰付、乗物御免可被下候、爲其如此御座候、恐惶謹言、

子三月廿三日

松平淡路守

寶永七庚寅年六月四日

唯今迄壹万石以上之陪臣、乗物願候節、主人ハ狀を取、且又其身ハ誓文狀を取り、被申候得共、向後左之通、主人ハ之狀計取之可被申候、其身より之誓文狀に不及候、

案文

私家來何と申者、知行何万石取らせ置候、依之乗物御赦免可被下候、爲其如此に御座候、以上、